

少ないといった具合であった。我々はまだ「山水」と呼ばれていたような概念的な風景画には飽き足らず、全てを打破して新しいものを作る意気込みで勉強した。よく文庫（後に図書館と資料館に分かれる）で西洋の画集などを見て勉強したが、画集など少なく、貴重であったので一番見たい本は誰かが借り出しているのが常だった。

会員のうち、小泉勝爾は最古参で美校の教官でもあったから、皆世話になった。矢沢弦月は東京女高師の教師で如才のない人だった。官展で一度だけ特選を取ったが、晩年は振わなかった。篠田柏邦は岐阜の多額納税者の息子で、大人しい絵を描いた。彼の「小原女」が官展の特選候補に昇ったとき、寺崎広業が、この男はいつでも特選になれるのだからと言って断ってしまったという話がある。

畠山錦成は人物画では抜群で、色彩的にあれ程うまく描ける人は居なかった。その皮膚の色、髪、濡れたような唇など、当時の日本画の技法ではとても表せないもので、まさに天才だと思ったが、しかし、上述のように帝展へ現代人物画を出すと落ちる。特選となったのは二点とも花鳥画であった。常岡文亀は丹波柏原の大地主の息子で、帝展で二回特選を取り、一時期大変もてはやされた。花鳥画を得意としたが、鶏頭や棕櫚の絵を見ればわかるように官展風の花鳥画と違って実に新鮮な作風であった。美校のコンクールに朴の木にカケスの居る絵を描いたが、金泥をふんだんに使い、緑青を見事に使って初夏の林間の感じをよく表していた。ただ、この人はある意味での戦争犠牲者で晩年は不遇であった。星川清雄は山形の人で、新しい美人画を描いて一時期非常に囑望された（入院中に関東大震災で病院が倒壊し、そのため死去した。——編者註）。久本春雄は春風駘蕩

としたところのある気のきいた絵を描いた。彼は釧路の遊郭の息子で、銘仙の纏袍（どてら）を着て友染の坐蒲団に坐り、遊女から来た手紙など読んで聞かせたものだ。根上富治は細密描写のすごい腕を持っており、美校在校中に鷹の絵で特選を取り、一時期大繁盛した。笑い話のようだが、名前の根上（ねあがり、値上がり富んで治まる）が書画屋に喜ばれたそうである。

革新を目ざして暗中摸索していた晨光会に対して、松岡門下の新興大和絵会の方は伝統を踏まえて新しいものを描こうという主義で、洗練された大和絵の伝統技法を土台としてその上に工夫を加えてゆくものだから、絵がちゃんと出来ており、官展でも良い成績を上げた。また、松岡先生は弟子を指導・バックアップすることに大変熱心だった。その点結城先生は面倒臭いのか、のん気であった。ライバルだった松岡先生が若死してから、心なしか結城先生も意欲的な活動をされなくなったようである。

晨光会は大正十五年に解散したが、その後旧晨光会員を軸に五十名ほど集まって新樹会を結成したが、もうその頃は戦争が始まって居り展覧会もたしか一回しただけで立ち消えとなってしまった。戦争、疎開で友人達も散り散りになってしまい、終戦となっても連絡のとれる人は数少なくなっていた。

#### ⑭ 大村西崖と中国

大村西崖は明治三十五年以来東洋美術史担当教授をつとめ、その間には『支那美術史彫塑篇』をはじめとして幾多の中国美術に関する著述をなしたが、彼が実際に中国の土を踏んだのは大正十年秋の

ことで、しかも休職した上、自費による旅行であった。その休職上申書に添えられた「海外旅行願」(控)には次のように記されている。

### 海外旅行願

小官儀

明治三十五年東京美術学校教授ニ任ゼラレシ以来東洋繪畫史、東洋彫刻史等ノ授業ヲ擔任致居リ積年ノ間主トシテ東洋美術ニ関スル研究ニ潛心努力罷在候 然ルニ研究ヲ進ムルニ隨ヒ東洋美術ノ大淵源タル支那ニ一遊シテ親シク其風土ヲ視察シ其學界諸名士ニ接シテ美術研究上ノ談論ヲ交換シ其藏弄ニ係ル稀世ノ彫刻、繪畫、古器物等ヲ多ク觀覽シ其他參考トナルベキモノハ盡ク之ヲ考查探討シ以テ自己ノ研究ニ資スルノ必要ナルヲ感ジ此志願ヲ以テ先年ヨリ私ニ其準備ニ著手中ノ處幸ニ畧ボ準備モ整ヒ候ニ付此際私費ヲ以テ約六箇月間ノ豫定ニテ支那ニ旅行ノ上前述ノ研究ニ從事仕度歸朝ノ節ハ學校授業上ニモ一層奮勵致スベキ存念ニ有之候間特別ノ御詮議ヲ以テ支那旅行ノ儀御許可ヲ蒙リ同時ニ休職ノ恩命相受度此段事情ヲ具シテ及御願候也

大正十年十月五日

右

東京美術学校教授 大村 西 崖 囀

文部大臣中橋徳五郎殿

この申上は同月二十日に許可され、同時に西崖は生徒監および幹

事を免ぜられ、また、本校より中国旅行中東洋美術に関する調査を行うことを囑託された。

西崖は十月二十一日に出発したが、西崖の要請により正木直彦は特別に次のような文書を公使館へ送り、その便宜を図った。

### 支那駐劄日本公使館へ依頼案〔控〕

本校教授大村西崖本年十月休職ノ上其筋ノ許可ヲ得テ私費支那旅行ノ途ニ上リ目下北京ニ滞在シ支那美術ノ研究ト其資料ノ採訪ニ従事罷在候處同人旅行ニ就テハ本校ヨリモ美術ニ関スル調査ヲ囑託致有之即同人ノ研究并資料蒐ハ單ニ個人的ノ意味ノミニテハ無之候間支那官憲及公私藏弄家等ノ諒解ヲ得テ諸般便宜ヲ與ヘラレ度右特ニ貴館ニ於テ御配慮ヲ加ヘラレ候様致度此段御依頼申上候也

年 月 日

学校長

かくて西崖は綿密な計画を立てて中国へ赴き、積年の渴望を癒した。明治二十六年に岡倉天心が決死の覚悟で中国旅行を試みた時は時代も変わり、日中兩國の交流が盛んで、特に美術界でも第一回日華聯合繪画展覽会の開催をめぐって急速に交流が盛んになっていくときでもあり、さらに西崖は中国美術史に関する著述によって前から中国の学者や画家に名を知られていたから、旅行は順調に進み、所期の成果をあげることができた。

西崖は翌十一年一月十八日に予定よりも早く帰国し、直ちに将来品(古名画の写真、書籍、中国現代画家の作品)の展示と講演を行

なった。それらは『東京美術学校校友会月報』第二十卷第七号に詳しく紹介されている。講演は「支那歴遊談」と題するもので、それによれば彼は二十年も前（本校教授任命の頃）から支那へ行きたいと思ひ、一度は休職して同僚に送別会まで開いて貰いながら中止になったことがあった（明治四十三年）が、文人画を描き出してから中国の古画を沢山見たい気が昂じ、ついに旅行を決心した。そこで正木直彦の推薦により啓明会に一万円の助成金を申請したが、大正十年七月却下されたため急拠大阪の知人と相談し、同年八、九月に二枚折金屏風二十双を描き（大正十二年刊行『遊西膏秣集』に収録）、一万二千元という潤沢な資金を得た。そこで栗原誠（同四年西洋画科卒、北京加藤洋行動務）を通訳兼随員として出発。朝鮮經由で北京に向かった。主目標は古名画の写真を沢山撮ることだったので、四つ切判の整色乾板を五十ダースも詰めた二十貫目くらいの函が五個と、外に土産物の書籍を詰めた箱など、十数個の荷物を携えての旅行だった。

北京では美術界の顔役金紹城（号北楼）にまず会って古画の見学と中国現代画家の作品、資料蒐集のための助力を頼んだ。また、北京の美術学校教授陳衡恪は未見ながら研究を通じて懇意だったので、彼に世話を頼み、皇帝の太保を勤めていた老学者陳宝琛には帝室の宝物を見ることができるよう依頼し、その交渉が進む間に明の十三陵、居庸関、八達嶺、雲崗の石仏などを見て廻った。帝室との交渉のために、彼は陳宝琛と宣統帝に自著『密教発達志』『支那美術史彫塑篇』および種々の図本を贈った。その結果、陳が帝室の古画を自宅へ借り出してくれることになったので、彼は北京の日本人

写真師を二人雇ってそれらの写真を八、九十枚写した。また一方では現代画家の資料を集め、さらに琉璃廠の主な本屋二軒に購入書目録を渡しておいて毎晩旅館に書物を届けさせ、最も版の良い、最も立派なものを選んで言い値で買い込んだ。そのため、またたく間に得がたい珍本を含む二百余部を入手することができた。北京では外に三十軒近い収蔵家を歴訪して五、六千点を見、六百余点を撮影した。その主なものについて、

其中で唐の梁令瓚の五星及二十八宿神形圖卷などは最も珍しいものであります、是等は追々其物について御話を申上げても善いと思ひます、それから王維の伏生授經圖卷だの、宋の李龍眠の五馬圖卷、盧鴻草堂十志圖卷、徽宗皇帝の臨古卷、趙孟堅の水仙圖及四香圖卷、元の黃大癡の茂蘭寶圖卷、唐子華、王若水、朱德潤等の山水卷などは、皆是まで日水では影も見たことのない、繪畫史上實に貴重なる寶繪であります、燉煌石室の古佛畫は、シユタイン等の持つて行かなかつた善い物が随分支那に遺つて居りますので、其中最も完全に考證の付く立派なものを三圖ほど寫して參りました、清朝の六大家の物などは謂はゆる腐るほど寫して來ました、

と述べている。天津でも同様に多くの資料を集めた。その後上海に直行し、一切遊覽もせず調査を続け、現代画家については北京、上海を通じて五十人、作品六、七十幅を蒐めた。かくて書物に三千元、合計七百五十枚の写真に五千元を費し、老大な資料を携えて大

正十一年一月十二日上海発の北野丸で帰国の途についた。この旅行は西崖にとって満足すべきものとなったが、それは資料収集の目的が果たせたというだけでなく、自著の『支那絵画小史』（大正十年本校の教科書に用いられた。）が五、六年前に上海で翻訳出版され、それが支那の師範学校の新教科書にそっくり引用されるなど、自分の著書学説が支那に行われているのを自分で確かめたこと、および、北京には本校の卒業生が五、六人も居り、特に上海では本校生汪亜塵（卒業期）が案内役を勤めてくれたりしたためでもあった。西崖はこの旅行を機に日中美術交流運動に乗り出すことになった。前出「支那歴遊談」のなかで、

私共は支那を研究して、日本の藝術文學を益するばかりでなく進んで支那へ乗り込んで支那の文化の歴史の上に足跡を遺さなければなりません、さうすれば初めて此大陸の文化史の上に、日本人の仕事が遺る譯になるのであるから、此狭い國の中で、何會だの何黨だのと互に鎬を削つて喧嘩をしたりばかりして居ないで、どんどん諸君は支那へ乗出したが宜からうと思ひます、さうして大陸の文化史に足跡を止めるやうにすることを希望します、

と言っているが、これは中国の文化史に深い憧憬の念を持つ西崖の、あくまでも学者としての誠実な心情からする提案であった。

西崖はこれ以後昭和二年に死去するまでにさらに四回の中国旅行を試み、研究資料の蒐集と中国の画家や学者たちとの交流につとめた。大正十一年二月には第一回旅行で蒐集した中国現代画家の作品

と小伝を編集して『禹域今画録』として日本に紹介し、一方、上海では西崖の『文人画の復興』の漢訳と陳衡恪著「文人画之價值」を合わせた『中国文人画之研究』が発行された。特に『文人画の復興』は同時代の中国画壇の新旧両派双方から理論的支柱として引用され、近年本書について中国で多くの研究論文が発表されているという。大正十二年四月の中国旅行の際は上海の画家呉昌碩、王一亭、唐吉生らと日支美術倶楽部設立を計画し、西湖有美書画社としてそれを実現させた。また、同十四年一月には北京大学で講演し、沈兼士、張鳳挙、陳垣、馬衡、沈尹默、鄧以蟄、錢稻孫、蔣夢麟、胡適、葉翰、馬裕藻ら同大学の学者たちと交流した。同年五月刊行の名著『東洋美術史』には長年の蓄積とこれらの旅行の成果が盛り込まれている。最後の旅行は大正十五年四、五月で、それは蘇州角直鎮の保聖寺を見るのが目的であった。『塑壁残影』に旅行の概要が記されている。なお、西崖の中国旅行の詳細は吉田千鶴子著「大村西崖と中国」（『東京芸術大学美術学部紀要』第二十九号）を参照されたい。

#### ⑮ 『東京美術学校校友会月報』第二十卷記念号

校友会機関誌『東京美術学校校友会月報』は明治三十五年六月の創刊以来大正十年五月を以て第二十卷目を迎え、校友会はこれを記念してその第一号を第二十卷記念号として発行した。表紙絵には岡田三郎助筆の唐花模様を用い、口絵には正木直彦校長の肖像写真と美術部、工芸部両校舎の写真を用いている。論説欄の構成は次のとおりである。